

<作品評>

審査員 小松健一

大賞 「海に憂う」

皆川 春奈（愛媛県）

女性の大賞受賞者は、昨年の第32回展に引き続き、史上三人目である。同時にこの作者は、昨年は推薦一席であり、二年続けての高位入賞というマリナーズ・アイ展始まって以来の快挙である。それも今回女性の応募者が20%超激減した中での受賞はいろいろな意味で称賛に値する。

作品の主役は猫たちである。人間以外の小動物などだけがモチーフの作品が大賞を受賞したのも初めてだろう。それも3枚組写真だ。絶妙のシャッターチャンスや構成力、プリントの仕上げなど申し分ないが、何と言っても心を捉えたのは、そのテーマ性である。瀬戸内を望む小さな漁港に群れる野良猫たちが「もうこれ以上美しい海を汚すな！！」「生命を大切に下さい」と、暴走を続ける人間たちに暗黙のうちに嘆き、訴えているのである。

推薦 「干潟クリーン作戦」

大滝 俊隆（千葉県）

東京湾の千葉側の最奥地に残された約40ヘクタールの谷津干潟。110種類を超える水鳥などの野鳥をはじめ、魚、貝、カニなど多様な生き物が生息する宝庫だ。1993年に国内初のラムサール条約登録湿地に認定され、国指定鳥獣保護区でもある。

この貴重な海岸を守ろうと地元市民たちがクリーン作戦をしている姿をドキュメントした作品だ。この日は20人以上のボランティアがアオサ（海藻）の駆除作業に参加している。

身近な美しい光景も実はこうした名もなき人々の善意によって成り立っていることが少なくない。その典型を見事に捉えている。モノクロームで表現したのも良かった。

推薦 「島の子」

小畑 一弘（岩手県）

2022年5月15日。沖縄本土復帰50年の節目の日を迎えた。この作品「島の子」は沖縄のやんばる地方の本部町での撮影だ。現地では「島さけ」、「島とうふ」、「島ぞうり」などと名称の上に「島」を付けて呼ぶ。「島の子」とはまさに「沖縄の子」という意味で作者はつけたのであろう。薄い雲がかかっている夕日を背にカメラを真っ直ぐに見つめる少女が良い。

眼帯をしたその瞳に吸い寄せられるようなパワーがある。この作者は、岩手県からはるか沖縄まで来て、この少女に出逢えたことが最大のラッキーであった。夕日などには目もくれず、ひたすら島の子にレンズを向けたのは大正解であった。てらいなど一欠片もない、ありのままの写真は強い。

特選 「帆船日本丸 接岸作業」 片山 和澄（神奈川県）

いままで応募された日本丸の写真の多くはいわゆる静の場面が圧倒的だった。停泊して帆を上げていたり、訓練している光景だった。

だがこの作品は、日本丸が接岸する様子を捉えている。甲板にいる多くの乗組員の緊張感が伝わってくる。タグボートの動きや白波、潮風の強さなどからも動的な作品となっており、迫力を感じる。横浜港の大栈橋からのパノラマを取り入れたのも写真にスケール感を生んだ。

特選 「いたい」 楠 友広（愛媛県）

この作品が生まれたのは、愛媛県の最南端に位置する旧西海町（現在は愛南町）だ。豊後水道に面し突き出ている半島だ。2004年に合併するまでこの町には、16を超す漁業集落があったので、どこの漁港なのかはわからない。

漁から戻った漁師が栈橋に待っていた猫にアジをあげようと投げた所、猫の頭に命中した。猫が全身に逆毛を立ててまるで「いたい！！」と言っているような瞬間を見事に捉えた。スローモーションのワンショットの様なユニークな作品であり、漁師の姿も相まってユーモラスな作品となっている。

特選 「波音はあなたにも聞こえる？」 鈴木 克哉（神奈川県）

同作品と同様妊婦を被写体として撮ったものがいくつかあった。それも写真の水準としては同レベルだったが最終的に残ったのがこの作品である。その最大のポイントは、作品のタイトル、題名であった。

意味不明なひどい作品の題名が多い中、このタイトルは群を抜いていた。「波音はあなたにも聞こえますか？」と言う問いかけの様な題名で、作者がこの写真に込めた思いが伝わってくる。被写体は愛する新妻であり、生まれてくるお腹の中の子は我が子であることがすぐに想像できるのである。作者のねらいは、夫婦愛、親子の愛という普遍的なテーマだ。この作品からいかに題名が重要であるかをしっかりと学んでほしい。

特選 「海辺のストーリー」

児玉 美智子(宮崎県)

アオウミガメの産卵地として知られる宮崎県延岡市長浜海岸での朝の光景だ。夜明け前に、亀の観察員が見つけた足跡を辿っていくと右の前足が失われた亀が産卵をしないまま、ゆっくりとゆっくりと海へ帰ろうとしていたと言う。写真から見ると力尽きたかと思ったが、遊びに来ていた子どもたちと無事に海に戻るまで二時間を見守り続け、その感動を静かにシャッターを切っている。朝霧が晴れ、青空が広がっていく中、少年と少女と観察員が心配そうに見守る姿が印象的だ。長く引かれた足跡からは傷害を負っている亀の生命への執着を感じるのだった。

優秀賞 「JAWS…」

Patrice BOITEAU(大阪府)

これまでも外国の人が応募してきたことはあったが入賞したことは初めてだ。これを契機に来年以降、たくさんの外国の人々が応募されることを望む。タイトルが「JAWS」となっている、どう言う意味があるのだろうかと思った。スピルバーグ監督の1975年制作の米国映画「JAWS」のことだろうか。巨大人食いホオジロザメが次々と人間を襲い、恐怖に落とし入れる内容である。

作品中の船長らしき男の右目は失っている様に見える。海での漁の最中に片目を失ったのだろうか。構成力があり、作品に良質な絵画のような重厚さがある。

僕はこの作品を見ていてハーマン・メルヴィルの小説を映画化した「白鯨」のエイハブ船長と重なった。

優秀賞 「海の汚染」

亀田 きょうかず(和歌山県)

何年か前の「総評」で僕は、これからのマリナーズ・アイ展の大きなテーマとして「海洋汚染」によって引き起こされる環境問題が世界的にもクローズアップされるだろうと呼びかけた。

それに応えたのか、年々「海洋汚染」をテーマとした作品の応募が増えている。この作品もその一つだ。

撮影地は、黒潮躍る紀伊半島西岸の田辺。古くから牟婁の津として発展してきた商港・漁港である。かの美しい海もまた汚染が広がっているのかと正直ショックを覚えた。捨てられた魚や汚染物質を切り取ったものだ。縞模様になった部分をクローズアップしている。この汚染物質が何かの造形になった時を狙えばさらにユニークな作品になっただろう。

優秀賞 「秋祭りの少女たち」

樋口 良夫(愛媛県)

撮影地の西予市狩浜の秋祭りと言えば、春日神社の祭りであろう。総檜木造りの本殿は19世紀前後の建立。境内には、鳥居、常夜燈など江戸時代のものも少なくない由緒ある神社であり、町の文化的なシンボルでもある。祭りには神輿、太神楽、角力練り、巫女の舞などの列が町内を練り歩く壮大なもので、この地域の代表的な風景だ。

そんな地域あげての行事に参加する少女たちの出番前の緊張した表情を捉えている。背景の小さな漁港に停泊する漁船はみな祭り旗や大漁旗をはためかせている。毎秋10月に行われているが、いかにも秋の澄みきった空が広がっているのも良かった。

優秀賞 「流されて」

榎本 隆志(和歌山県)

審査会場に悲鳴があがった。作品を机に並べる作業をしていた女性からだ。首、両手、両足のない女性の体が浜に打ち寄せられている写真を見て驚いたのである。僕も見て、その生々しいリアルさに一瞬我が目を疑ったほどだ。

サスペンスドラマでもあるまいしと思ったものの皮膚の感じやビキニスタイルの水着など迫真性があり、見れば見るほどなきがらに見えてくるのだ。作者も発見した時にはびっくりしたという。そして「落ち」と言うと女性の胴部のクッションであった。

誰かが愛用していたものを捨てたのが、この浜に流れ着いたのだ。それにしても人騒がせな話。海への投棄はいけませんぞ！！

優秀賞 「空と海と流木」

吉田 恭章(石川県)

珍しく風景写真が入賞した。撮影地は石川県かほく市。この地は能登地方と加賀地方をつなぐ街道沿いに位置している。市域は能登国、加賀国にまたがっており、江戸時代には宿場町として栄えた土地だ。かほく市周辺は日本海に面した外日角海岸、権現森海水浴場など遠浅の海岸線が続いている。

作者はいつもの様に海岸を撮影に行ったら、砂浜が見事な水鏡になっており、夕日に染まった入道雲と形の美しい流木があった。この印象的な光景は神様から賜ったものと、静かにシャッターを切ったのに違いない。神秘性のある風景写真ではある。

優秀賞 「3.11 祈りは続く」

酒井 正志（茨城県）

あの甚大な被害をもたらした東日本大震災から十年後の今年の3月11日に撮影したものだ。

場所は、第31回展で大賞「慰霊」を受賞したいわき市薄磯海岸である。この地区には当時266世帯761人が暮らしていたが、そのうちの130人が亡くなったか、行方不明者である。いわき市全体の犠牲者の何と4割以上を占めているのだ。

毎年行われる津波慰霊祭の終わったあとも波が寄せる海岸にひざまずいて祈りを捧げる女性を遠くから捉えたものだ。肉親を失ったのか、女性の深い哀しみがいつまでも胸を衝く。

優秀賞 「横浜の思い出」

大澤 ひかり（東京都）

作者は16歳の高校生。今年の春休みに横浜の山下公園にある氷川丸で撮ったものだ。何気ない記念写真の様に見えるが、じっと見ているとなかなか良い。

まず、時代性を捉えている。被写体の友だちもだが後ろにいる人々も皆、マスクをしている。新型コロナウイルス感染している今日であることがわかる。次に画面を大胆に斜めにしたことによって不安感、未来への確かな展望が持てない心境を表現している。そして手前に入れた自分の手だ。友だちと同じピースをしている。互いの絆、連帯感を感じるのである。

来年から十代のグランプリ作品に贈る特別賞を検討している。ぜひ、多くの若い人たちに声をかけ、回りの友だちに呼びかけて下さい。マリナーズ・アイ展の未来は君たちの肩にかかっているのだ。

優秀賞 「三角波」

福島 耕司（静岡県）

撮影地は静岡県牧之原市静波海岸だ。遠州灘と駿河湾に囲まれた御前崎の駿河湾側の根元に位置する。サーフィンの名所として知られているが、これほどの波が押し寄せるのか。子どもたちがびっくりしていたと書いているが、僕も驚いた。まるで波が創り出した富士山である。子供たちが驚いて見上げた瞬間と三角波が頂点に達した瞬間を捉えたシャッターチャンスは見事と言うしかない。

会長賞 「縁起物」

稲澤 丈紘（神奈川県）

静岡県西伊豆町田子地区にいまも伝承されている潮(塩)鰹。別名「正月魚」とも呼ばれ、昔から船乗り、船関係者などに縁起物、お供え物として配られている。いまでは商品化され、寒い冬、軒先に吊るされて保存する光景はめっきりと少なくなりましたが田子地区独特の風物詩となっている。日本一しょっぱい塩漬の鰹だが酒好きにはたまらなく美味ではある。

伊豆田子港は、昔から静岡県を代表する鰹の一本釣りをはじめとした遠洋漁業港として発展してきた。その地にいまも潮鰹の頭と稲穂をお供えする風習が残っていることは嬉しい限りだ。

また、その民俗文化を見逃さずに捉えた作者の眼もシャープである。

特別賞 「宇宙船」

加賀谷 航太（神奈川県）

この写真は初めて見るものだった。確かに「宇宙船艦ヤマト」を連想させるようにタイトルの通り「宇宙船」の様にも見える。進水直前の潜水艦を正面から撮ったものだが、よくこの場に居合わせて撮れたものだ。

海上自衛隊の潜水艦だろうからおそらく機密事項だらけだろう。作業する人々も6人程写り込んでいて現場感が出ている。神戸港での撮影らしいが、船員である作者だからこそ撮れたのであろうか。

兎にも角にもスクープ写真であることは間違いない。22歳の作者のこれからの写真創作に期待してやまない。